

ホームホスピスで看とりをした遺族による看とりの満足度と関連要因

訪問看護ステーションぱりおん 吉田 幸代

研究報告要旨

目的：ホームホスピスでの看とりの満足度とその関連要因を明らかにする。

方法：ホームホスピスで看とりとなった38名の家族を対象に、「望ましい死の達成」の尺度を用い、遺族の視点から看とりの満足度を評価した。また看とりまでの生活や家族の看とりの体験は自由記述とした。

結果・考察：望ましい死の達成は15項目において、満足度が高いと示された。看とりまでの生活では【当たり前の日常を整える】ことを基盤に、【人間としての尊厳を守る】こと、【疑似家族の献身的な支え】があり、【状態や様子に合わせた医療職者の関わり】が関連要因として示された。また看とりでは【最期まで人間としての尊厳を守る】、【疑似スタッフの献身的な支え】は共通しており、その他に【看とりの準備】となる関わりや看とりの体験の【看とりの満足感・後悔】が明らかになった。【処置やエンゼルケアの苦悩】が語られ、必ずしも満足度につながるわけではないことも示唆された。

研究報告書

I. 研究動機

急速に少子高齢化が進む中、医療や介護が必要な状態になっても、できる限り住み慣れた地域で安心して生活を継続し、その地域で人生の最期を迎えることができる環境を整備していくことは喫緊の課題¹⁾とされている。住み慣れた地域の中でサービス付きの高齢住宅や特別養護老人ホーム等での看とりが推進されているが、充分ではないのが現状である。

そのような現状を受け、住み慣れた地域で最期まで安心して暮らせるよう、市原美穂らは平成 27 年に一般社団法人全国ホームホスピス協会を設立し、ホームホスピスが全国各地に作られ始めている。ホームホスピスは疾患や障がい、医療的ケアの有無に関係なく、地域の空き家を地域の資源として活用し、入居者それぞれの介護保険や医療保険を活用しながら、往診診療や 24 時間の介護・訪問看護等を受け生活をする場である。A 市内にホームホスピスは 3 か所があり、これまで 125 名を看とってきた。また猛威を振るっている新型コロナウイルスの影響で、病院・施設での面会制限・禁止などがあり、人生の最期を家族で迎えられないケースも少なくない。最期の時を家族で過ごしたい、県外の家族にも会わせたいとの思いで、本人や家族が退院を希望し、ホームホスピスに入居するケースも例年以上に増えており、入居期間も亡くなるまでの数日という短期間の場合もある。

そこで、これまでホームホスピスで看とりをした家族を対象に、ホームホスピスでの看とりの満足度と、どのような生活が看とりの満足につながるのかの関連要因を明らかにすることが出来れば、様々な制限が求められる時代においても、家族で穏やかな最期を迎えるための支援につながり得るのではないかと考えた。

II. 目的

A 市ホームホスピスで看とりをした遺族へのアンケートから、看とりの満足度とその関連要因を明らかにする。

III. 用語の定義

疑似家族—ホームホスピスでのケアスタッフ（看護師・介護士）のことを指す。ケアスタッフは疑似家族として 24 時間 365 日の生活を支援している。

1. 研究デザイン

IV. 研究方法

量的研究および質的記述的研究。望ましい死の達成を評価する尺度である「望ましい死の達成(以下 GDI と示す)」²⁾を用い、遺族の視点から看とりの満足度を評価した。また入居者の生活や遺族の看とりの体験については自由記述とした。

2. 研究参加者

2015年からの5年間にホームホスピスで看とり、当訪問看護ステーションが対応した38名の家族。家族に無記名の質問紙を送付し看とりについてアンケートを行った。アンケートによって悲嘆状態となった場合、研究者および所長が対応することとした。

3. データ収集期間

2020年10月～12月

4. 分析方法

分析においては、GDIは各項目を算出し、比較を行う。自由記述は文章の意味が読み取れる単位を分析単位とし、記述として示した。記述の類似性および同質性に基づき、サブカテゴリー、カテゴリーを生成し、看とりの満足度とその関連要因を考察した。

5. 倫理的配慮

本事業所の理事長等に研究内容を説明し、内容等に関する諮問を受け、同意と承認を得た。研究参加者に研究目的、個人情報の保護、研究への参加は自由意思であり、不参加によって不利益が生じないことを書面にて説明した。研究の同意は、書面の返信をもって同意が得られたものとした。

V. 結果

1. 研究参加者の概要と入居者の概要

質問紙の回収は28名、質問紙の有効回答率は73.7%であった。

アンケートに回答した遺族は子ども85.7%、配偶者14.2%であった。年代は60代50%、50代25%、80代14.3%、70代10.7%であった

入居者の主な疾患は癌、心疾患、脳血管障害、糖尿病、高血圧、認知症、骨折などであった。入居期間は3か月未満が25%、3か月～1年、1年から3年がどちらも32.1%、3～5年が3.6%、5年以上は7.1%であった。必要な医療的ケアは吸引、胃ろう管理、点滴、麻薬による疼痛コントロール、在宅酸素、インスリン注射などであった。

2. 望ましい死の達成(GDI)

望ましい死の達成(GDI)において、緩和ケア病棟と施設の値と比較を行った。図1のグラフはアンケートの「非常にそう思う」「そう思う」「ややそう思う」の合計(%)値を示した。値が緩和ケア病棟と施設ともに上回っていた項目は、14項目であった。

「望んだ場所で過ごせた」は緩和ケア病棟の値は上回っていたが、施設の値より下回っていた。値がどちらとも下回った項目は「他人に弱った姿をみせてつらいと感じていた」等2項目であった(図1)。

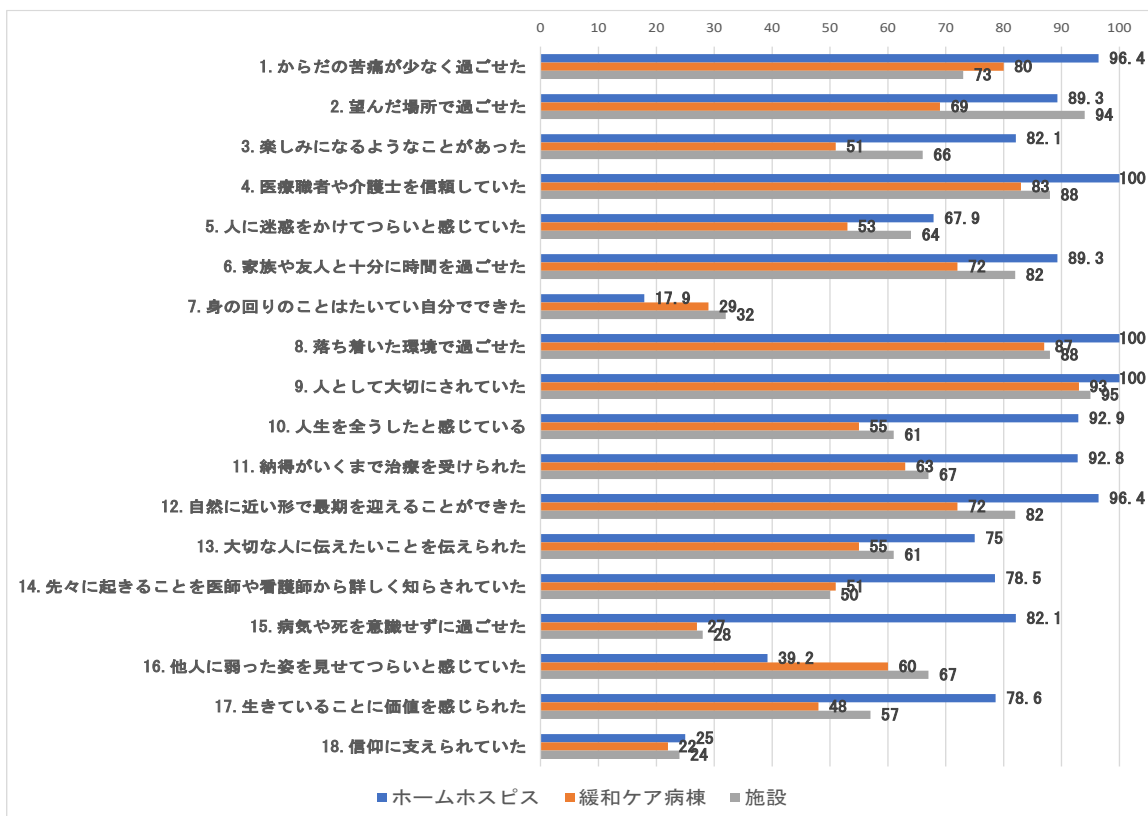


図1 望ましい死の達成(GDI)の比較

3. ホームホスピスでの看とりまでの生活について

ホームホスピスでの看とりまでの生活について自由記述で質問し、分類した結果、42 の記述から、10 のサブカテゴリー、4 つのカテゴリーに分類した (表1)。

4. ホームホスピスでの看とりについて

ホームホスピスでの看とりについては、50 の記述から、10 のサブカテゴリー、5 つのカテゴリーに分類した (表2)。

表1 ホームホスピスでの看とりまでの生活

カテゴリー	サブカテゴリー	記述
<p>当り前の日常生活を整える</p>	<p>食事を整える</p>	母が自らの力で食べ、生きていきたいと思う力を自然な形で引き出して頂けた
		自宅で用意することのできないきちんとした食事が有難かった
		病院で何も食べれない父がゼリーを食べたとき嬉しかった
		食事も工夫して提供して頂いた
		食欲がない時自宅からの持ち込みができた
	<p>生活感のある日常</p>	台所からの音や匂い、笑い声など生活感のある日常
		病院では味わうことができない、木のぬくもりのある環境で、食事ができ、スタッフの温かい言葉かけで日常と変わらない生活ができていた
		まるで自家の様に母の友人たちが見舞いに来て下さったこと。そしていつもお茶を出して下さった
		日常の生活の中で皆と生活を共にでき、見守られての最期は本人には幸せな事だった
		ホームホスピスの居間に台所で作られるみそ汁の匂いが流れてくるとまるで自宅で母が作ってくれた食事の事を思い出した
		認知症だった為、意思の疎通を図ることが難しく、本人ももっと何か伝えたいことがあったと思うが、家庭的な環境の下、最期まで穏やかに過ごすことが出来た
		自宅に連れて帰ってきて居場所がないのか、2.3時間もするとホームホスピスへ帰りたいたいと言っていました。すっかり我が家になっていたよう
	<p>季節のイベントや日常の楽しみ</p>	入所当初に入所者、スタッフとゲームなどをして楽しんでいたこと
		庭に出してもらったりして季節を感じさせてもらった
		母の誕生日をみんなで祝いできた事 季節ごとのイベントが楽しかった 皆で遠足に行ったこと
<p>家族だけではできなかった生活の実現</p>	最期までこの家で暮らせた事から感謝しています。家族ではできませんでした。	
	私が家でできなかったことを充分にして頂けたことにとでも感謝している。 兄も遠方で、私自身は残される父(夫)のことまで思いやれる余裕がありませんでした。今父はしっかりと生きていくことができるのは、ホームホスピスで過ごした時間があったからだに感謝しています 入居する時に母が今までどういう人生を送ってきたかを尋ね、認知症の症状が進んでいく中でも母の尊厳を守って対応して頂いた事	
<p>人間としての尊厳を守る</p>	<p>人として大切にされる</p>	ホームホスピスに入る前のグループホームでは、褥瘡があった為少し手がかかって大変職員の長の方から厄介者扱いされていたが、ホームホスピスの職員は丁寧に接して下さった
		主人に関わる全ての職員の方が病人としてよりも、個人としての人間性を大事に接して下さることが本人が安らかな毎日を過ごせたと思う 名前を呼んでもらうと目をパチッとして嬉しそうだった
	<p>身体拘束が必要ない生活</p>	拘束がないことが、家族としてほっとしたことだった 病院では身体拘束されることも多く、その姿を見るのが耐え難かったが、ホームホスピスではそれがなく、人として接して頂いたのが嬉しかった
<p>疑似家族(スタッフ)の献身的な支え</p>	<p>スタッフの家族のような関わり</p>	スタッフが家族の様に接して下さった
		どなたにもご自分の親の様に接して頂き、感謝している 父がどうしたら幸せな最期を迎えられるのかを考えて対応してくれた
	<p>スタッフが24時間見守ってくれる安心感</p>	毎日会いに行けて夜でも笑顔でスタッフさんに迎えられて、母が話ができなくても(様子について)話してくれた
		ホームホスピスに入る前の施設での生活がいかに孤立した空間に一人ぼっちでいたのかと思うと、申し訳なかつたと思う
		連絡ノートに母の様子を詳しく書いて下さっていて、見守りが良く出来ていると思った 母は何も言えませんでした、ノートを見るたびに安心したことが心に残っている 母が眠れない時など、お話しを一緒にして下さったこと。
	<p>本人・家族の思いを引き出すスタッフの関わり</p>	父が面会に来た時の母の反応の違い等をスタッフの方が父に伝えてくれた
		ホームホスピスでスタッフの皆様から、父(夫)に出来ること、父(夫)の存在が母の支えになっていることを、スタッフの皆様言葉から、感じられたのではないかと思います 家長がと言って下さり、知らなかった一面を見られて嬉しかった 母が寝ている時には、父の話を聞いて下さった事で、父の想いを吐き出すことができていたのではないかと思います 入所した日、「疲れただろうから、部屋に行って横になる？」と聞いたところ、頸を横に振って、リビングに残ることを選びました。話したら「ありがとう」と言ったら涙が出ました
<p>状態や様子に合わせた医療職者の関わり</p>	<p>医療的ケアやリハビリへの取り組み</p>	最期まで熱心に関わり付き合ってくれた 歩けるように寄り添って下さったので母も幸せだった 気管切開、胃ろうまでして頂き、その管理もしてもらってありがたかった

表2 ホームホスピスでの看とり

カテゴリー	サブカテゴリー	記述
最期まで人間としての尊厳を守る	最期まで当たり前の生活を送る	最後の最後までゼリーやプリン・アイス等を食べさせて、身内で手をさすりながらとても良いお別れが出来た
		夕食後静かに息を引き取ったと聞き、本当に幸せな最期だったと思う
		臨終の雰囲気は暗くなかったこと
	最期まで人として大切にされる	夫が病院で亡くなった経験から、追われるごとく病院を出なければならなかったため最期まで人として大切に接して頂けた
		「〇〇さん」と優しく声をかけて頂いたことがとても嬉しかった
		最期は施設の方が駆けつけて下さりとても心強かった。母を大切にしてくださいましたことを嬉しく思う
		みんなで最後までケアしてもらったことは本人もとても喜んでいと思う
		しゃべれなくても反応がなくても母にいつもと変わらず声をかけて下さったこと
		日中いろいろなお声かけをして頂き、いろんな刺激を与えて頂き父にとっては楽しかったであろうと思う
		スタッフ皆であたたかく旅立ちを見守って下さったこと
疑似家族（スタッフ）の献身的な支え	馴染みのスタッフ・入居者との関わり	亡くなった時にスタッフの皆さんも一緒に泣いて下さった
		一緒に生活して下さった入居者の方が泣いて下さった
		最期と一緒に過ごして下さった介護士の方がお通夜にも参列して下さったこと
		朝6時頃に亡くなったのにも関わらず、しかもものすごい雨の中、ホームホスピス家のスタッフの方が出勤して見送りもしてくれて有難かった
		自宅のような場所、家族のようなスタッフの方々と過ごせた事は私の思い出でもあり、本人の思い出になったと思う
		大勢のスタッフ、看護師が駆けつけて寄り添って下さり、私は満足感でいっぱいでした未だに寂しい思いがなかったのが不思議です
		事務的ではなく心の通ったケアで入居者のみならず家族にとってもほっこりした
		たくさんの方に支えて頂き眠るように遊かせて頂いたこと本当に感謝している
		最後の最後まで皆さんに見守られ、家庭の中で迎えられた事は感謝です
		私に変わって母の最期をケアしてもらった 私達が到着する前までの見守り感謝している
訪問看護師の関わり	最期を迎えた日訪問看護の方がずっとそばに居て声をかけて下さった	
看とりへの準備	看とりにつながる身体の変化を家族に伝える	母が最期を迎えようとした数時間前にかかりつけ病院の看護師さんがみえて冷静に今の状況とこれから起こりうる様々な体の変化を話してくださいました。不思議と私はその一言で一言を落ち着いて伺うことができた
		水を絶つことが一番楽だと知った
		看護師さんのおっしゃる順を経て息を引きとった
	最期の時を生活の中で家族と共に見守る	母の呼吸が不安定な状態で見守っているときに、ホームホスピスで出していた夜食を食べ、家族で母の話をして談笑した事を鮮明に覚えている。もうすぐ旅立つと誰もが分かっていたが、不思議な気持ちだった
		母を見守りながら食べた夕食のあたたかいみそ汁やおにぎり、忘れられません
		最期が近づいた時、ホームホスピスの2階に泊めて頂き夜勤の介護士さんと一緒に過ごすことができ心強かった
		ケアマネジャーもかけつけてきて下さって手厚い心遣いを頂き、夜中にも関わらず直のスタッフさんが丁寧な対応をして下さった事今でも目に焼き付いています。 急変した時にスタッフの方々がしっかりと見てくださる＝家族の一員が実感
処置・エンゼルケアについての家族の苦悩	最期の処置に対する家族の苦悩	点滴をしたことがよかったのかどうか悩んでいる。苦しみを長引かせてしまったのではないかと
	エンゼルケアを共に行う事への家族の苦悩	母が亡くなった時のエンゼルケアでは、介護職の方から一緒に身体を清めるように言われたが、正直復せ細った母の体を見ることは苦痛だった 最期の母のケアをすることはとても苦痛に思えた 最期のケアをすることが家族の救いになると諭されたが、一緒にケアするよりも家族で母を見守りながら夜食を食べて笑ったあの時間の方が救いになっていると思う
看とりの満足感・後悔	家族で最期を見守る時間を作り出す	臨終に間に合うことができた
		母の最期の時を見守り、家族を呼び寄せることができ皆で母を送り出すことができた
		私が最期かもしれない時期を逃しそうなのを細やかに連絡下さり母が一番頼りにしていた家族3人が見送ることができた
		家族と共にとても穏やかに最期を過ごすことができた
		数十年前に母親が仕立てた真新しい着物姿で穏やかな表情で旅立つことができた
	看とりの後悔・衝撃	家族や親戚の者と静かに過ごす時間をつくって頂いたことが今でも思い出される
		何より弟と二人で看とることができたのが幸せだった
		家族が着いた時、医師も同時にご臨終ですと言われたとき。どうしてもっと前に行かなかったのかとそのことだけが後悔
		母の最期を看取ったことで母を思い出さずとき最期の瞬間が思い出されて寂しい
		あの映像（最期を看取った時の光景）が忘れられない
	娘としては仕事の為とはいえ自宅で介護したかった 海外出張で母の最期に立ち会えなかったのは今でも心残り 母の最期に対して私がしたことがあれでよかったのかは、いまだに考えることがある 仕事の都合で思うように顔を出すことができずにいた 誰一人家族のいない中で遊ってしまった父の事を思うと、たった数ヶ月自分で看れなかったことが今でも悔やまれる	

VI. 考察

1. 望ましい死の達成(GDI)について

データの分析からホームホスピスで看とりを迎えた入居者の家族は、緩和ケア病棟、施設と比較し、看とりの満足度が高いことが示唆された。身体的な面の「からだの苦痛が少なく過ごせた」、生活面の「楽しみになることがあった」「落ち着いた環境で過ごせた」、人としての尊厳を示す「人として大切にされていた」「人生を全うしたと感じている」「生きていることに価値を感じられた」「自然に近い形で最期を迎えることができた」「信仰に支えられていた」、家族との関わりの「家族や友人と十分に時間を過ごせた」「大切な人に伝えたいことを伝えられた」、医療的な面の「納得がいくまで治療が受けられた」「医師や看護師から詳しく(病状を)伝えられていた」「医療職者や介護士を信頼していた」「病気や死を意識せずに過ごせた」において値が上回っていることから、満足度が高いと判断した。また「家族に弱った姿を見せてつらいと感じていた」はネガティブな意味であり、この項目の値は緩和ケア病棟・施設よりも下回っており、逆と捉え満足度が高かった項目に加え、15項目とした。緩和ケア病棟・施設の値を下回った項目は、「身の回りのことはたいてい自分でできた」「人に迷惑をかけてつらいと感じていた」であった。入居者の多くは疾患や医療的ケアを必要とする場合もあり、重症度は様々である。そのため家族が生活全般に支援が必要で、ケアスタッフに迷惑をかけていると感じていたことが推測された。

2. ホームホスピスでの看とりまでの生活について

GDIでの分析において、身体面、生活、人間の尊厳、家族との関わり、医療職者についての項目において満足度が高い事が示された。看とりまでの生活については、自由記述の中により具体的な内容が示されていた。食事を整え、生活感のある日常があること、自宅では実現が難しい家族が望む生活を作りだすことなどの当たり前の日常生活を基盤に、身体拘束のない、人間としての尊厳を守られることが家族の看とりの満足度へとつながっていることが示唆された。また、現場ではケアスタッフ(疑似家族)が入居者のことを名前だけでなく、親しみを込めて「お父さん」「お母さん」と呼ぶ関わりを多く目にする。入居者の日々の生活を見守り、支え、家族のようなケアスタッフの関わりが満足度に関連していることが記述から明らかになった。

3. ホームホスピスでの看とりについて

看とりは最期の時だけではなく、看とりにつながる生活の延長線上に在ることと考える。そのため、看とりにつながる生活と看とりの記述を精読し内容の共通性として、最期まで日常生活を整え、人として大切にされること、人間としての尊厳を守ること、生活を支え、看とりの過程を共に過ごすケアスタッフ(疑似家族)との関わりが満足度に影響していた。看とりの過程で変化する身体状況を家族に伝えつつ、家族と共に見守ることで、家族にとっては最期の時を向かえる準備となっていた。また看とりに立ち会えたとしても必ず満足のいく看とりとなるわけではないことも示され、家族の死による喪失感や苦悩は亡

くなった後も継続している家族がいることも示された。家族が点滴等の処置を選択したことの葛藤や後悔の記述もあり、悔いが残らず、家族が最善の選択ができ、そしてそれを肯定できるような医療職者の役割も大きいことが明らかとなった。さらに最後のケアであるエンゼルケアに、家族の参加を促すことが看とりの満足につながらず、逆に死の衝撃や苦悩を強める可能性となっていた。

これらから看とりの満足度の関連要因は、看とりのその時だけではなく、看とりにつながる日々の生活のあり方や人間の尊厳を守る関わり、生活や看とりの過程を共に見守るケアスタッフ（疑似家族）との関わりが関連していることが示唆された。

VII. 結論

看とりの満足度とその関連要因は、看とりにつながる日々の生活のあり方や人間の尊厳を守る関わり、生活や看とりの過程を共に見守るケアスタッフ（疑似家族）との関わりが関連していることが示唆された。また、家族が点滴等の処置を選択したことの葛藤や、家族が死後のエンゼルケア等をケアスタッフから促されたことによる苦悩もあった。入居者、家族の思いをくみ取りつつ、さらに寄り添った関わりを実践することが今後の課題である。

引用・参考文献

- 1) 厚生労働省. 厚生労働白書.2019年. 000524475.pdf (mhlw.go.jp).2020年アクセス
- 2) 宮下光令.望ましい死の達成度と満足度の評価.遺族によるホスピス・緩和ケアの質の評価に関する研究 運営委員会編.(財)日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団.2010:18-22.
- 3) 厚生労働省. 人生の最終段階における医療に関する意識調査.2018年. saisyuiryo_a_h29.pdf. 2020年アクセス
- 4) 有末裕子:在宅療養者が終末期・看とり期を迎える場所に対するキーパーソンの思いー訪問看護の役割を考えるー.日本農村医学会雑誌 2018;66巻5号:589-594